

# 萩市新博物館基本構想

## はじめに

萩市は、毛利氏36万9千石の城下町として、また日本の近代化の先駆けとなった明治維新胎動の地として全国に知られ、それらにかかわりのある建造物や史跡など数多くの文化財に恵まれています。また、祭礼をはじめとした特徴ある生活文化が今に伝えられ、日本海や河川の影響を受けつつ形づくられた多様な自然も存在しています。このように萩市は、今日も町全体に豊かな自然、歴史、文化を包含し、あたかもまちじゅうが博物館の展示室であるかのような状況を呈しています。

さて、そのような中、萩市郷土博物館は、昭和34年（1959）に前身の科学博物館に人文分野の資料を加えて、総合博物館として発足しました。以後40年間、郷土博物館は萩市の自然や歴史、文化について調査研究、資料の収集を積み重ね、展覧会や探訪会、観察会などの諸活動を通して市民に親しまれてきました。

このように郷土博物館は、萩市における教育文化の充実発展に重要な役割を果たしてきましたが、平成12年3月に国道191号の拡幅事業にともない解体されました。新博物館は、これまでの博物館が蓄積した資料や活動を基礎にして、生涯学習や情報化社会などの新しい時代の要請に対応できる機能を持つことをめざすとともに、「まちじゅう博物館」の中核的施設として「萩学」を提唱し、萩の城下町の幕開けとなる萩開府400年にあたる、平成16年11月に開館する予定です。

このたび策定した基本構想は、新時代の萩市にふさわしい博物館の設置目的や基本理念、諸機能、展示構成、施設計画などをとりまとめたものです。この基本構想が、新博物館の建設ならびに運営等に十分に反映されるよう努めたいと思います。

平成13年3月

萩市長 野村 興 兒

## 1. 基本構想策定にあたって

### (1) 地域の課題から

萩市は、山口県の北部中央日本海側に位置する都市で、地理的には九州と山陰地方、さらには日本海を隔てて朝鮮半島や中国大陸との接点にあたる。古代においては、萩は九州と山陰・北陸方面に伝播する文化の通路にあたり、また日本海を介して大陸と日本列島との結節点として対外交通上の重要な地点を占めていた。特に近世においても、慶長9年(1604)に毛利輝元が築城し開府して以来、萩は防長両国36万9千石を領有する毛利氏の城下町として全国有数の都市に発展した。文久3年(1863)に藩府が山口に移り、萩は政治的・経済的な発展から取り残されたが、その反面、都市の変貌が最小限にくい止められた。そのため、萩市は恵まれた自然を背景に、現在でも江戸時代の城下町絵図がそのまま通用する町並みや街路が遺存し、城下町の典型的な構造を知ることができる全国でも稀有な都市となっている。

この城下町・萩はまた、わが国の近代化の始まりである明治維新の原動力となった吉田松陰をはじめ多くの先達が生を受け育まれた記念すべき土地でもある。「維新のふるさと」ともいわれるこの地で、保存され継承されてきた多様な文化財や史跡は、ここに生きた人々の躍動するドラマと彩り豊かな生活文化の歴史をわれわれに語りかけてくれる。

萩市の歴史的な町並みとともに保存され継承されてきた多様な自然・文化的遺産には、国指定の重要文化財、史跡、重要伝統的建造物群、重要無形文化財などが多く含まれているほか、他に例を見ない天然記念物なども存在している。さらに県指定、市指定の文化財なども加えると、その構成はきわめて多岐にわたる。それぞれの文化財や史跡などは、これまでに萩市民の誇りとして認識され全市をあげて保存、保護の努力がなされてきたところであるが、それら自然・文化的遺産や先人の足跡に関心を抱く人々はきわめて多く、年間百数十万人にもおよぶ人々が国内各地はもとより、諸外国からもこの地を訪れている。

萩市は、これらの国民的な財産ともいえるべき貴重な自然、あるいは文化的な遺産などを保護、活用し、将来にわたって継承していく課題を担っている。また、萩は、近代日本の礎を築き上げた数多くの人材を輩出したまちである。そのため中央指向が強くなり、周囲、地域住民もその流れを奨励する気風が歴史的に形成されてきた。しかし、新しい地方の時代、少子化の時代を迎えて、東京一極集中の流れが変わり、情報化の進展などから

萩にいながら世界を相手に活動できる環境ができつつあり、人々の心の充足が求められる中で、この環境を生かした、次代の萩を創造する人材の育成が急務となっている。さらに、高齢化、女性の社会進出、余暇時間の増大、文化・知識指向など、市民のニーズが多様化してきている中で、生涯学習体制の一層の拡充が課題となっている。このような萩市が抱えている地域の課題に、いかに応え、その課題を解決していくか、今後の萩市の将来展望の中で、新博物館が担う役割は重要なものとなるであろう。

新博物館は、萩市が持つ自然・文化的な遺産の再発見あるいは新発見の場として、また萩を創造する人材育成の場として、さらに生涯学習推進の場として、先端、中核の機能を持つことが期待される。まさに、新博物館は萩市の新たな地域文化形成の拠点となりうるものである。

さて、今日の成熟期を迎えた生涯学習社会の進展を意識し、新しい萩市の未来像の創出にも関わりを持ちながら、観覧者の立場に立って萩市内の文化財や文化財関連施設等<sup>註1)</sup>に目を向ける時、総合的な観点からそれらの施設の体系的な位置づけを検討しなければならない。

萩市内に存在するそれらは、それぞれが個別に個性のある立場を維持しつつあるものの、萩の自然や歴史、文化を通覧して学ぶうえでは、個別のであり、全体としての系統性をとらえにくくさせている。これは、近年、萩市を訪問する人々の数が若干下降しつつある問題とも関連させながら検討する必要があるとされる。特にこうした現状は、児童生徒の修学旅行等における「課題学習」のきめ細かな実施などに対しては、大きな問題点となることも認識しなければならない。

今日、萩市のようにまちじゅうが生きた博物館そのものとしてとらえられる地域において、人々が地域の自然や歴史、文化をより身近なものとして総合的に理解するためには、文化財や文化財関連施設が相互に連携を深め、それぞれがより効果的に役割を発揮するための手だてが必要であることはいうまでもない。

このような観点から、この地に住む市民はもとより、各地から訪れる人々が萩への系統的な理解を一層広げ、さらに深めることを可能とする情報のセンターとしての新博物館の設置は、緊急の課題であるといわなければならない。

「萩市新博物館」がめざす新しい博物館の役割は、きわめて重要である。

註1) これらについては次のような施設がある。

文化施設：山口県立萩美術館・浦上記念館、萩焼資料館、萩史料館、熊谷美術館、吉賀大眉記念館、吉田松陰遺墨展示館、吉田松陰歴史館、松陰

記念館、萩市自然と歴史の展示館

そのほか、社寺院：松陰神社など5件、歴史的建造物・史跡：萩反射炉など31件、事跡・公園：指月公園など6件、記念像：田中義一像など6件、自然資源：藍場川など14件がある。

(「萩市観光大綱」平成11年による)

## (2) 博物館の課題から

わが国の博物館は、戦後、年を逐って増加傾向をたどり、平成10年度における館数は3千600館を数え、それらの入館者数も年間1億6千700万人に達している(「博物館研究」35巻3号)。

最近、日本博物館協会では、平成11年度版博物館白書「日本の博物館の現状と課題」を刊行したが、それによると博物館の最近の利用状況は、「利用者総数」では経済事情に比例するように若干の低下傾向にあるものの、「利用態様」においては進展する生涯学習体制のもとで、これまでとは質的に異なってますます拡充、深化する方向へと大きく変化しつつあることがわかる。

そのような状況の背景には、社会の変化にともなって人々の学習要求が一層多様化し高度化する傾向にあること、とくに最近の情報通信技術のめざましい進展からさまざまな機器の利用により、質の高い広範な学習活動が容易に実現しつつあることなどが存在している。こうしたなかで、地域においては「人づくり」「町づくり」の観点から地域の課題を見直そうとする取り組みがなされ、また、これまでの学校中心の考え方から、生涯学習体制への移行が具体的に進められはじめたことなども、博物館をめぐる情勢に大きな影響を与えていると思われる。人々の学習環境が大きく変化しつつあるなかで、わが国の博物館においても、望ましい館運営や館活動のあり方をめざしながら、これまでも多様な取り組みが数多くなされている。

館運営においては、利用者としての市民の声を取り入れて柔軟な館運営を実現させるとともに、「ボランティア」や「友の会」活動を活発化させ、参加する人々の意欲的な学習活動を支えながら、より広く質の高い館活動を進めている実践も多く見られる。

展示活動については、調査研究の成果を積極的に取り入れて、常設展示の部分改訂が常に容易となる展示方法を開発し、実物資料を重視する展示の意義を再認識するとともに、最新の情報機器を積極的に導入して観覧者の理解を一層助長し、展示効果を飛躍的に高めている成果も見られる。

教育普及では、展示場に解説のための専任職員を配置したり、児童生徒

や教師向けの「手引き書」を刊行し配布しているほか、体験学習室を設置して博物館資料を実際に手にして使用したり操作しながら、学芸員の指導によって計画的に学習を積み上げている事例も報告されている。また、来館の機会に恵まれない地域の住民のために、博物館側が地方へ出向いて「移動博物館」を開催する試みも次第に増加しつつある。

一方、調査研究や資料の整理保存活動では、博物館の最新の研究成果や膨大な資料情報のデータベース化が進み、それらについても市民が利用できる体制が徐々に整備されつつある。さらに、「友の会」活動の発展として市民が自主的にさまざま調査研究をはじめたり、学芸員とともに調査研究活動に参加したりする例も報告されているほか、海外の姉妹都市の博物館と提携して共同研究が進められている活動もある。

こうした広範な活動のなかで、最近、急速に増加しているのは情報機器による博物館の「ホームページ」の開設である。利用者が居ながらにして、常時、博物館の諸活動にふれることができ、必要に応じて資料に関する検索も容易に可能となりつつある状況は、今後の博物館活動をさらに充実させ発展させる原動力となっている。

このようなわが国の特徴的な博物館活動が各地において意欲的に展開されている情勢のなかで、「萩市新博物館」はどのような「博物館像」をめざすべきであろうか。これはきわめて重要な課題である。

誇り高い歴史の基盤に支えられ、すぐれた数多くの自然・文化遺産に恵まれ、まちじゅうが生きた博物館としてとらえられている萩市において、今、この地にふさわしい個性豊かで活力のある博物館の実現が望まれる。

「萩市新博物館」がめざす新しい「博物館像」への期待は、きわめて大きい。

## 2. 萩市新博物館設置の目的

### (1) これまでの経過から

萩市郷土博物館は、昭和21年6月に、熱意ある市民の強い要望を受けて、萩市熊谷町に萩科学館として開館し、主に自然科学関係資料を中心に館活動を開始したのが始まりである。

その後、萩市の地域柄から歴史、民俗関係の資料が市民から多数寄贈されることとなり、この部門が次第に充実しはじめたことから博物館のそれまでの活動の範囲を拡充させ、総合博物館ともいえる体制を整えて、昭和34年8月に萩市江向に「萩市郷土博物館」として新たに発足した。

「萩市郷土博物館」は、これまでに自然、歴史、民俗、産業、美術工芸

などの広範な部門の資料の収集に努めるとともに、「萩」地域に関する調査研究に活動の力点を置き、さらに市民とともに多彩な教育普及活動をも積み重ねてきた。なかでも開館当初から博物館を中心にして「宇宙の科学」を長年にわたって学び続けてきた「萩天文同好会」の自主的活動は、これまでの萩市郷土博物館の歩みのなかでは特筆すべきことであろう。

開館以来、平成11年にいたるまですでに40年の歴史を持つ「萩市郷土博物館」は、国道191号の拡幅により解体移転のやむなきにいたり、構想を新たにして拡充を図り、21世紀の新時代にのぞむ「城下町・萩」にふさわしい博物館として発足することとなる。

「萩市新博物館」は、萩市内に点在する文化財や文化財関連施設の中核としてふさわしい建設候補地を萩市堀内355番地（萩藩主毛利家一門大野毛利家上屋敷跡）に選定し、平成16年の「萩開府400年」の記念すべき年に装いを新たに開館する予定である。

## （2）萩市新博物館の目的

萩市新博物館は、長年にわたって積み上げてきた萩市郷土博物館の活動の成果をふまえ、これまでの萩市郷土博物館協議会および萩市博物館建設検討委員会における周到な検討結果をもとに、萩市の自然や歴史、民俗、産業、美術工芸等の各部門にわたる文化遺産を保存、継承し、21世紀の新しい時代を迎える萩市にふさわしい博物館活動の展開をめざして、その建設目的を次のとおりとする。

- 1) 萩市新博物館は、「萩」というテーマに即して、自然、歴史、民俗、産業、美術工芸等に関する資料を収集、保管し、展示するとともに調査研究を行い、萩市民はもとより国内外からの人々に広く利用される施設とする。
- 2) 萩市新博物館は、新しい時代にふさわしい館活動を展開し、萩市民が意欲的に生涯学習を進め、新しい文化の創造に参加するための拠点となる施設とする。
- 3) 萩市新博物館は、「萩」のテーマのもとに自然、歴史、民俗、産業、美術工芸等に関する情報を積極的に収集し、住民の協力を得ながら、萩市民はもとより国内外にも広く発信できる施設とする。
- 4) 萩市新博物館は、地域の文化財や文化財関係施設との連携を図るとともに、それらを補完し、市民や国内外からの人々が「萩」の自然や

歴史、文化に対して一層理解を深めるためのセンター的役割を果たす施設とする。

### 3. 萩市新博物館の基本理念

萩市新博物館は、上記の目的を実現するために館活動の基本理念を次のとおりとする。

#### (1) 萩市新博物館の基本理念

- 1) 萩市新博物館は、「まちじゅう博物館」の中核的施設として機能し、自然環境および文化的、歴史的環境を継承することをめざす。
- 2) 萩市新博物館は、「萩」地域について自然、歴史、民俗、産業、美術工芸などのあらゆる分野から総合的に調査研究する「萩学」を創造することをめざす。
- 3) 萩市新博物館は、さまざまな博物館活動をとおして、「人づくり」と「町づくり」に貢献し、萩らしいとか萩ならではの表現される「萩」の特質をふまえた本物にこだわりを持つ「新たな地域文化」の創造と発展に寄与する。そしてそれらとともに、「萩」に住む人や「萩」にふれた人々が心豊かに生きていくことができるような「新しい時代」を拓くことをめざす。
- 4) 萩市新博物館は、萩市民はもとより、修学旅行生を含め国の内外からこの地域を訪れる人々が「萩」に対する認識や理解を深めるために、幅広く系統的な情報を提供する「インフォメーション・センター」として機能することをめざす。

#### (2) 基本理念に関わる事項

##### 1) 「まちじゅう博物館」について

「萩」のまちでは、まち全体があたかも博物館の大きな展示室であるかのように、永年にわたって培われてきた本物の自然的環境や歴史的環境が人々の生活とともに息づいている。それら博物館資料ともいえる多様な自然・文化遺産を、よりよい形で保全し、後世に伝えていくことは、「萩市」と「萩市に住む人々」の大きな責務である。行政と住民とが一体となって「まちじゅう博物館」の整備を進めることによ

って、「萩」は世界的に一層注目されるまちになりうる。

「まちじゅう博物館」の中核的施設となる新博物館は、「萩」の自然や文化遺産の調査、研究、保存、教育普及等の活動をとおして、「萩」への理解を深めることや、市民や地域の文化財・文化財関連施設相互の連携を深めること等に寄与し、地域の遺産を次世代へ継承することに大きく貢献しなければならない。

## 2) 「萩学」について

「萩学」とは、「萩」という地域の特質をさまざまな分野から総合的に調査研究することを意味する。新博物館は、この「萩学」のセンターとして、「萩」地域の特質とそれにかかわりを持つ事柄についての調査研究を進め、情報の蓄積や発信を行う。このような活動により、内に対しては「萩」が過去と現在を踏まえながら未来を展望し、独自の発展を遂げることに貢献する。また、外に対しては「萩」が世界の共有財産となることに大きく寄与することをめざす。

## 3) 「人づくり」について

「人づくり」とは、内に対しては、明日の「萩」を担う人材が、「萩」の自然や歴史、文化の特質を理解し、興味を抱き、「萩」について主体的に学習を進めるための「橋渡し」をすることである。その結果として、将来にわたり「萩」を内側から支える「人」を育むことをめざす。

また、外に対しては、「萩」を訪れたり、「萩」に興味を抱いたりする人が、「萩」の自然や歴史、文化の特質について理解を深める「橋渡し」をすることである。その結果として、将来にわたり「萩」の特質の保全と継承に協力を得られる人材を育み、人々のネットワークを形成することをめざす。

## 4) 「町づくり」について

「町づくり」とは、「萩」の本物の自然的・歴史的環境について、その掘り起こしや現況を記録、資料化し、情報発信等を行うことにより、全国的にも稀な環境を将来にわたり保全継承し、世界の共有財産となる町を形成することである。

## 4. 萩市新博物館の名称

萩市新博物館の名称は、設置の目的や理念が端的に表れており、かつ、親

しみやすく、次代に伸びゆく「萩」の力強い印象を示すものとする。

## 5 . 萩市新博物館の機能

萩市新博物館が、その設置の目的や基本理念を実現するために必要な機能として、次の事項が考えられる。

### ( 1 ) 調査研究機能

新博物館は、調査研究活動を館活動の中核に位置づけ、その成果を展示および教育普及に強く反映させることにより、常に新鮮で活力ある館活動を展開して市民の熱意ある生涯学習への意欲に応える必要がある

特に、調査研究における出発点を「萩」とし、「萩」の自然、歴史、民俗、産業、美術工芸などを総合的にとらえ、「萩学」の創造を主体的に進めることは、新博物館の重要な課題である。さらに萩についての理解を深めるため、周辺地域から日本全体、さらに世界へと順次理解を広げていく必要がある。

これら調査研究活動は、綿密な中・長期計画のもとに遂行することとし、数年を単位として総合的なテーマを設定し、それに基づいて各分野の課題研究を手がかりとしてテーマの解明を図る必要がある。これらについては、常に市民や地域社会に対して開かれ、その協力を得ることができる体制のもとに進められることが望まれる。

なお、「萩学」の基本的研究課題については、市民の協力を得ることはもちろん、広く海外をも含めた他地域の研究機関、研究者等との連携なども視野に入れた幅広い立場からの取り組みを考える必要がある。この点については、大学や他の博物館との共同研究体制の構築も一例としてあげられる。

当面、新博物館においては、今日にいたるまでの活動の実績をふまえ、これまでの研究成果ならびにすでに収集済み資料のデータベース化を急がなければならない。

調査研究機能を強めるためには、均衡のとれた学芸員の配置、研究体制の確立、研究施設の改善、学芸員の資質向上などが新しい課題として位置づけられる。さらには、大学等との研究交流を視野にいれ、外部研究者のためのデータベースを含む資料開発室の設置が必要である。将来的には、客員研究員の創設も考慮する。

## ( 2 ) 資料収集・保管機能

### 1) 資料収集機能

博物館における資料収集活動は、きわめて重要である。博物館が所蔵する資料は、時宜を得た適切な収集活動の集積である。今後も博物館の所蔵資料を充実させるうえで、この資料収集機能はなお一層重視されなければならない。

新博物館においては、これまでの館活動によりすでに多くの資料が集積されているが、それらについてはさらに全般的な観点から検討を加え、新博物館にふさわしい均整のとれた資料収集方針を明確にすることが重要である。特に収集活動を進めるにあたっては、展示構成との関連や「萩学」研究をも考慮した焦点を絞った計画が必要であろう。

博物館が行う博物館資料の収集の問題については、新しい博物館建設の機会をとらえ市民の関心をさらに呼び起こすなかで、あらためて積極的な関係費料収集の促進を図る必要がある。資料の具体的な収集に際しては、萩地域のみにとどめず、すでに他部道府県へ転出した人々に対する働きかけなども積極的に行って、効率的な収集活動を展開しなければならない。

### 2) 資料保管機能

資料の保管機能は、収集した資料を安全で常に安定した環境のもとに永久保存を図ることを目的としている。

新博物館の建設予定地は、河川によって形成された三角州上に位置するため地下水位が比較的浅くかつ海岸にも近い。そのうえ周辺は、住宅が密集する市街地である。したがって資料の保全のためには、湿度、塩分、害虫、菌類などへの対策がとりわけ重要である。このため、計画的な燻蒸措置も必要である。とくに収蔵庫等については、各資料の材質の特性等を勘案したうえで、よりきめ細かな保管体制を考える必要がある。また、資料の構成内容によっては、恒温・恒湿保管室などの配置も検討する必要がある。

資料の保管については、立地条件上、とりわけ災害対策、特に都市火災、地震、水害等から資料を防護するため施設設計上の配慮のほか、資料保管上からも多様な安全対策が常に立てられていなければならない。

また、資料の保管機能を高めるために、資料の搬入から収蔵までの作業が一貫して円滑に進められるよう施設設備上の配慮を行うとともに、日常の館活動においても資料を利用する際に効率的な搬出・搬入

作業が可能となるような登録・保管システムの確立も必要である。

なお、収蔵庫の配置については、近い将来、狭隘化する可能性があるので、収蔵庫の増設、あるいは隣接する箇所が存在する既存施設を収蔵庫として転用することも考慮しなければならない。

### (3) 展示機能

博物館の展示機能は、来館者が最初に博物館と接するうえでは最も身近な営みである。来館者は、展示室における資料群にふれることをとおして、博物館の存在を最初に認識する。博物館の展示は、「博物館の顔」にあたるともいわれる由縁である。

新博物館における展示は、常設展示と特別（企画）展示との併置が考えられるが、それらの展示内容は、博物館の建設の目的に合致し、また、「萩学」に焦点を置いたものでなければならない。

常設展示に展示される資料は、実物、制作物・複製、模型、ジオラマ、グラフィック・等のほか、映像などを多彩に組み合わせたものとなるが、新博物館においては、恵まれた多くの館蔵費料を意欲的に活用することを重視し、実物資料の積極的な展示替えを行うなど、常時、展示に新鮮さと弾力性を与える必要がある。

また、特別（企画）展示においては、常設展示で通常取りあげることがむずかしいテーマ、常設展示の一部をさらに発展させたテーマ、「萩学」にかかわる特別なテーマ、最新の収集コレクションの紹介や調査研究の新しい成果の発表などが主要な対象となる。特別展示室では、年間をとおして、それらの展示が絶えず開催されていることが望ましい。

常設展示、特別（企画）展示ともに、それぞれの展示効果をさらに高めるうえで、近年、めざましく発達しつつある映像機器、情報機器の積極的な利用を図ることも検討しなければならない。また、印刷物等を用いて展示内容や資料について解説することも、来館者の理解を高めるうえで重要なことである。

なお、日常の展示活動を円滑に進めるために、展示準備室等の配置などについても特に配慮される必要がある。

### (4) 教育普及機能

博物館の教育普及機能は、調査研究、資料の収集・保存、展示などの館活動を基盤にして展開する利用者への多様な手段による啓発活動をはじめ、さまざまな協力援助活動が主体となる。特に生涯学習の成熟期を迎えた今日、博物館が行う多彩な教育普及活動に対する市民の期待は大きい。

新博物館においては、設置の目的のもとに、これまでの伝統的な活動実績をふまえ、博物館が置かれている条件に合わせながら、幅広い教育活動、広報活動、出版活動、協力支援活動などを行う必要がある。

教育活動では事業<sup>註2)</sup>を定期的に関催し、幅広い階層に向けた多彩なプログラムによる学習の機会を市民に提供する必要がある。

広報活動では、一般市民に対して、博物館活動の現況報告や計画されている事業の予告を中心にして、目的に合わせた広報資料の作成および配布などがある。

出版活動では、博物館が行う多様な事業に適宜関連させた広報紙、手引書、解説書、目録、報告書などの作成および配布が考えられる<sup>註3)</sup>。

協力支援活動では、最近特に注目されている学校教育に対する協力援助やさまざまな社会教育活動との連携などがあげられる。また、関連団体としての「博物館友の会」「各種同好会」「ボランティア団体」などの育成および協力援助活動も、新しい博物館の取り組みとして注目されており、今後の館活動の幅を広げ、質を高めるうえできわめて重要である。

註2) 主なものとして、講演会、講座、講習会、実習、見学会、観察会、映画会、発表会などがある。

註3) 主なものとして、入館者用リーフレット、ポスター、博物館だより、博物館要覧、展示解説書、資料解説書、展示資料目録、収蔵資料目録、図録、調査報告書、研究紀要などがある。

## (5) 施設設備管理機能

博物館が年間数十万人もの来館者を迎えるなかで、日常の活動を円滑に進めるために、施設設備においては絶えず万全の管理体制がとられていなければならない。

博物館の施設が常に快適な環境に保たれ、来館者の学習活動が効率的に行われること、観覧者に対する日常の安全対策が十分になされていること、多種多様な博物館資料が展示室や収蔵庫等で常時適切な状態で保存されていること、災害時の観覧者の安全対策および博物館資料の保全対策が十分であることなどは、新博物館の施設設備管理機能を検討するうえで最も重要な課題である。

特に新博物館の場合は、年間、相当数の観覧者が見込まれることから、情報コーナー、常設展示室、特別展示室などにおける利用者のための安全対策は、常に重視されなければならない。近年、ノーマライゼーションの考え方が社会的に定着し、生涯学習関連施設においても身障者が容易に学

習することが可能になりつつあるが、新博物館においてもそれらの人々が楽しく安心して参加できる体制や施設設備の整備が必要である。

また、展示部門における災害対策について、災害時の展示場における避難経路の確保、誘導方法の確立と利用者への周知などに関し、日ごろから周到な準備が必要である。特に、地震災害時には照明器具の落下、展示ケースの移動や倒壊、展示資料の落下、転倒等による破損が想定されるが、いずれも技術的な面からの事前防止対策が取られていなければならない。

一方、博物館資料については、新博物館の立地条件からみて防湿、防虫、殺菌対策についての十分な措置が必要である。そのためには、環境に配慮した安全な資料燻蒸設備の導入も必要である。

これらのほか、博物館を訪れる来館者すべてに提供するサービスとして、アプローチ施設の管理機能も検討する必要がある。それらには、適切な面積を持つ駐車場や公衆トイレ、雨天時の来館者の利便を図り、学校団体などの昼食休憩場所に転用できる空間の確保が考えられる。また、来館者用のカナエテリアや安息空間としての喫茶室などの配置も望ましい。

建設地の立地条件や萩地域の文化的環境を考えると、新博物館敷地内はもとより、その周辺部においては緑地景観、水辺景観、歴史景観の保全に努めるとともに、それらを最大限に生かして重要伝統的建造物群保存地区にふさわしい立地環境を整える必要がある。特に博物館周辺部においては、植栽に配慮するとともに、市民が休息休憩できる空間を確保することが望まれる。

## (6) その他の新しい機能

### 1) 情報収集・発信機能

最近の博物館活動においては、これまでに述べた資料の収集や調査研究および教育普及にかかわる部門だけでなく、「情報」の収集・発信に関する活動もその専門性が注目され、博物館活動の一端として日ごとに重要性を増しつつある。「情報」の収集・発信については、その収集から蓄積、加工、提供する状況に合わせた独自の形式<sup>註4)</sup>や実施方法を決定することが重要である。特にこの部門の充実については、可能な限り充実させなければならない。

ただ、データベースには、二通りあることを理解しておかなければならない。一つは外部に出せるコンテンツと、学芸員使用などの内部利用や限られた研究者利用に限るコンテンツの区別である。また、外部利用には、館内に限る来館者用と館外のインターネット用との二つがあ

る。それぞれに応じて、サーバー等システムの系統を区分けする必要がある。

さらに、所蔵資料のデータベース化を急ぐ必要があるが、そのために全ての資料を対象とするのではなく、所蔵資料のうち主要なものや指定文化財などを優先的に選択するほか、展示に恒常的に使われる資料などを選んで、当初におけるデータベース化の対象資料とする。これ以後、順次他の所蔵資料にも範囲を広げ、年次計画策定のもとに完成の度合いを高めていく必要がある。

このような業務とともに重要なことは、博物館が実施するさまざまな事業に関しても、データベース化することである。調査研究のすめ方やそれらの成果、教育普及活動の内容や実績なども、今後の館活動をさらに発展させるうえで重要な基礎データとなる。

これらのほか、ホームページによる情報提供サービスについては、現在、各博物館においてさまざまな取り組みが行われている。それらについては、一般的な館の営業案内から展示室の概況をはじめ特徴的な展示資料、収蔵資料などについての紹介が行われつつある。博物館におけるこれら情報提供活動については、今後さらに発展する趨勢にある。

萩市新博物館においても、その活動目的に合った方式を工夫することが望まれる。

註4) 代表的な歴史系博物館の項目を例としてあげると、資料名称、資料整理番号、資料法量(寸法)、原所有者、採取地、採取方法(購入・寄贈・借用・寄託・交換・発掘など)、写真(原則4×5版または6×7版、補助的35mm版、ともにカラー・モノクロで撮影、現在はデジタル化が進行中)、資料保存状況(含補修歴)、資料出品歴(館内・貸出歴)等が記入される。ただし、専門分野により項目に若干の相違がある。

## 2) 博学連携機能

近年、ますます進展し変化しつつある地域社会において、人々がさらに充実した社会生活を営むうえで、生涯にわたって進めつつある学習活動が果たす役割は、きわめて大きい。社会教育機関においては、新しい理念のもとに相互に連携を進め、市民の学習活動を質的に高い立場から支援する体制が必要である。

博物館における小中学校の児童生徒の利用率は、最近の調査によれば、対象とした1,875館のうち、小中学生の利用が「最も多い」とし

た館は15.3%を占めており、日常の教育活動の一環として博物館を利用している頻度が、かなり大きいことが知られている<sup>註5)</sup>。

従来博物館においては、学校の児童生徒の受け入れに際し、展示室での学習活動に重点を置き、学校側に指導をゆだねる傾向にあった。しかし、最近になって博物館の持つ教育機能が評価され、博物館や当該学校において学芸員の指導による「地域学習」「体験学習」等が盛んに行われ、また、学校教員との各種共同作業が見られるようになった。これらの学習活動は、博物館が学校教育の場として活用されたり、学校が新しい社会教育の場として利用されたりしていることを示しており、博物館が学校と連携して進めている館活動の新しい形態ととらえることができる。

特に博物館においては、豊富な実物資料を生かした教育活動への参加をとおして、子どもたちが自ら学び、自ら考えながら、ものごとを主体的に判断する習慣を身につけることが可能である。これら博物館の持つ教育機能は、今後、生涯学習社会のなかでますます重視されることとなり、「博学連携」のもとに、新たな役割を期待されるものと思われる。

新博物館においても、展示の構成や各種の館活動を計画するにあたっては、学校・教員との連携を重視し、萩市の子どもたちへの配慮を十分に行う必要がある。具体的事物に即し五感に訴える博物館の特性ともいえる教育的環境のなかで、新博物館は、「アウトリーチ（館外活動）」などの新しい学習方法を導入し、萩市の子どもたちが地域についての自然や歴史、文化の学習を行い、学び方やものの考え方を身につけながら、健全な心身を育むことができるように、一層貢献することが望まれる。

博物館と学校が緊密に連携を取りながら、地域の教育的機能を高める方策を検討するためには、学校教職員、学芸員、教育委員会担当者等が協力して、具体的なシステムや必要なカリキュラムの編成および学習支援のための刊行物等の作成について検討を行い、それらの具体化実現を図ることが望まれる。

また、学校教育とは別個に、萩に固有の資料や情報を充実していくとともに、各種研究条件を整備して、民間研究者も含めた「萩学」の拠点にする必要がある。

註5) (財)日本博物館協会：「日本の博物館の現状と課題」(博物館白書平成11年度版)

### 3) 学習支援機能 - とくにボランティアについて

生涯学習社会の進展において、博物館が果たす役割は、一人ひとりの市民の学習意欲を支え、学習活動に対する協力と援助を行うことにある。その発展として、主体的に活動する市民と博物館とが一体となって、より幅の広い、質の高い館活動を展開することが望まれる。特に博物館の教育普及活動においては、自らが主体的に学習を進めている市民が、ボランティアとしてさまざまな活動に参画している例が多い。

従来は、市民一人ひとりが個々に自己学習を進めていたが、近年では他の人々とともに学び合うなかで、相互に高め合う学習へと次第に発展し、多様な活動をとおして地域社会に寄与するという状況が見られる。その結果、それぞれが生きがいを見いだしながら社会参加を果たすようになってきた。

萩市においては、すでに制度化された各人の専門を生かした学芸委員による調査研究、資料整理、各種行事の指導、天文同好会による天体観測の指導等にその先駆的実例が見られる。

また、すぐれた文化的遺産や恵まれた自然の価値を理解し誇りを抱いている人々が、「萩観光ボランティアガイドの会」「椿見どころ案内人の会」などを自主的に組織し、萩市を訪れる人々に対して案内役を務め、「萩」の自然、歴史、文化などを解説し案内するボランティア活動を続けている。

博物館においても、それぞれの活動に対して、市民の側から参加の要請が出されている今日、ボランティア活動の積極的な導入によって、生涯学習の機会の間口を広げ、対話と連携にいろどられた活動を展開することは、萩市新博物館の新しい時代を創出することに直接つながるものである。

博物館活動におけるボランティアは、市民と博物館との交流の場を仲立ちする役割を果たし、同時にそれらの人々による解説・案内活動は、「萩」にやってくる人々に対しては他に得難い学習支援にもなる。

新博物館におけるボランティア活動は、まず、学芸委員を拡充し、博物館の専門的な裾野を広げ、基盤を強化するとともに、子どもを含めた市民、さらには修学旅行生の学習支援に関わる「学芸ボランティア」を育成することがあげられる。新博物館は、「まちじゅう博物館」の中核施設として、既存のボランティアと連携を深め、萩における総合的なボランティア活動の充実発展に寄与することが望まれる。

また、多くの博物館において導入されている博物館愛好者「友の会」

活動は、リピーターを確保し、博物館の支持基盤を広げ、また将来のボランティア育成の場ともなりうる。

これら活動の導入にあたっては、ボランティアの研修を担当し、ボランティアや友の会と博物館とをつなぐ窓口となる学芸員が不可欠であり、また、そのための施設設備が必要となる。

## 6. 萩市新博物館の組織と人員配置

博物館が円滑に運営されるためには、規模の大小にかかわらず館の組織体制がより適切なものでなければならない。すぐれた館蔵資料（コレクション）をそろえ、近代的な展示を構成し、優秀な学芸員を配置していても、組織体制が実状にそぐわないものであれば、均整のとれた活力のある館運営を推進することは難しい。

このような点で、博物館の組織は発足後の館活動を推進するうえでの重要な基盤となる。したがって、萩市新博物館の設置の目的を実現させるためにも、組織体制については十分な検討が必要である。

博物館の管理運営が円滑で効率的に行われるためには、組織体制が合理的であり、かつ関係する職員が活動しやすい機能的なものであることが望ましい。

なお、「萩市郷土博物館条例」については、萩市新博物館の設置にあたり、その組織、運営および管理に関する事項について、新たな検討を加え、改正する必要がある。

人員配置については、市民学芸員のような生涯学習参加型の新しいタイプのボランティア等の養成を図るとともに、「萩学」の想定する専門分野をカバーし、IT時代にふさわしい情報発信機能にも対応できるよう、学芸体制の充実を図る。また、新博物館の管理運営が円滑に機能するためには、事務職員等の配置にも留意する必要がある。

なお、新博物館が多様な市民の要請に応えるためには、学芸員の博物館経営およびそれぞれの専門分野に必要な知識・技術を常に向上させる必要があり、そのため専門職にふさわしい研究環境の整備を図る必要がある。

## 7. 萩市新博物館の展示構成

萩市新博物館の展示は、「萩」の特徴的なテーマに関して自然、歴史、民俗、産業、美術工芸などの各分野から焦点化した「課題（テーマ）展示」方法を導入する。展示は、常設展示と特別（企画）展示とし、常設展示は実物、グ

ラフィック、レプリカ、模型、映像などにより構成する。特に常設展示では、長期間展示替えを行わない固定的な構成ではなく、常に部分的に改訂（取り替え）が可能となる可動的な展示方法を導入する。なお、この展示構成は、展示室内の隔壁位置と対応する。

また、特別（企画）展示においては、年間、数回程度、館蔵資料を中心とした展示を開催するとともに、年1回程度は個人所蔵になる重要資料、他館所蔵の大型コレクションの借り受けなどによる規模の大きい特別な展示会を開催する。

#### （１）常設展示の構成

展示の構成としては、導入的な「まちじゅう博物館・萩へのいざない」および「城下町・萩」「萩の人々と近代化への潮流」「萩・再発見」というそれぞれの課題（テーマ）を設定する。

#### （２）展示導入部の概要

##### 「まちじゅう博物館・萩へのいざない」

エントランスホールにおいて、映像機器等を用い「まちじゅう博物館・萩」を印象づけながら、博物館の基本理念を明らかにする。

また情報検索コーナーにおいて、博物館と「まちじゅう博物館・萩」のガイダンスを行うとともに、「萩学」を深めた来館者を町へ誘う。

#### （３）各課題（テーマ）の展示概要

##### 1) 「城下町・萩」

慶長9年（1604）11月、毛利輝元は指月山の麓に建築が進む萩城に入城した。

阿武川（橋本川、松本川）と日本海に囲まれた三角州の上には、膨大なエネルギーが注がれ、短時日のうちに城下町が整備された。「萩」は、低湿な三角州に手を加え自然と共生することで発展を続け、やがて全国有数の都市となった。そして、江戸時代末の文久3年（1863）に薄庁が山口に移るまで、防長二国、萩藩36万9千石の藩府として栄えた。

江戸時代に人口3万人を数えたとされる「城下町・萩」は、当時の大都市でもあった。城内をはじめ城下には、毛利氏の重臣や武士、町人などさまざまな人が住まいし、それぞれに特徴のある生活を営んだ。城下後背地や藩の内外からさまざまな人や物が入り出す城下では、活発に商いが営まれ、都市的な文化も形成された。現在も萩を代表する祭礼である住吉祭りや天神祭りは、江戸時代に成立し、都市的な祭礼

として発展し今日に至っている。

ここでは、「萩」の成立、構造、変遷等に注目しつつ、江戸時代の城下町を俯瞰的にとらえ、そこに展開する歴史や特徴ある人々の営みを紹介する。また、江戸時代後期の「城下町・萩」の町人地に注目し、城下町の都市としての側面に迫り、祭札をはじめとした特有の都市文化を浮き彫りにする。

## 2) 「萩の人々と近代化への潮流」

幕末期の経済的矛盾は、萩藩内に未曾有の一揆を引き起こし、藩体制の動揺をもたらした。一方で、アヘン戦争による清国敗戦の情報と、度重なる外国船の出没は、日本海を控えて立地する「萩」の人々にとって大きな脅威となった。

こうした内外からの危機に対して、萩藩では村田清風を中心として天保の改革を実施し、特に武備の充実に努めた。その機運はやがて「萩」の人々へと浸透し、下関における攘夷決行と外国船砲撃をきっかけとして、「城下を守るために皆で菊ヶ浜に土塁を築く」という行動に駆り立てた。それは、身分も老若男女の別も問わないものであった。

そのような状況のなかで、吉田松陰ならびに松下村塾に触発された人々や、進取の志を持った人々は、世界に目を向けながら、時代の変革を求めていった。こうして萩の地で生み出された胎動は、混沌とした幾たびかの動乱を経て、日本をやがて近代化へと押し進める大きな潮流となった。

ここではまず、幕末期の萩の人々が、具体的に内外からの危機にどう対処し、維新の動乱にどう関わったかに注目する。そして、萩が輩出した数々の人材が近代化に果たした役割にふれる。それらの人々とおして、萩における「明治維新」「近代化への潮流」を浮き彫りにする。

## 3) 「萩・再発見」

「明治維新」の後、萩の町は、他の主だった藩府であった町のように県庁所在地にはならなかった。大規模な都市開発、火災、震災や戦災も受けることなく、江戸時代からの豊かで多様な自然的環境や歴史的環境を伝えつつ、山口県日本海側の一地方都市として今日に至っている。

そのような町の一角をなす、例えば城山や藩の御立山であった指月

山や笠山には、萩地方を代表するような豊かで多様な自然が卓越して存在している。また、明治時代以降に夏蜜柑栽培が奨励された堀内地区には、広大な武家屋敷地の地割が良好に伝えられ、浜崎地区には、水産加工業や活発な商いを背景に良質の町屋や文化が伝えられている。これらの他にも、長い年月を経て培われてきた、変らぬ自然や文化財をはじめとした江戸時代の城下町を起源とする歴史文化に、「まちじゅう」の至る所で身近にふれることができる。それは、あたかも町全体が博物館の展示室であるかのような状況を呈しており、萩の町の大きな魅力となっている。

現代でも江戸時代の絵図をそのまま地図として用いることができる町に住み、豊かで多様な自然的環境や歴史的環境に恵まれた私たちは、そのことの意義を今一度再発見、再認識し、「まちじゅう博物館」萩を良好な形で保全しつつ次代に継承する責務を負う。

ここでは、「萩市鳥瞰図」を絵解く形で、現在の豊かで多様な萩の町の自然環境や歴史環境を紹介し、「まちじゅう博物館」のさまざまな要素と関連させつつ来館者を町に誘う。

#### (4) 展示構成上の基本的な考え方

萩市新博物館の展示は、萩の自然や歴史、文化を対象とし、それらを象徴する事柄を紹介する。歴史、文化はその背景となる自然と密接にかかわりを持つという視点から、自然と歴史、文化とを一体的に扱う手法により常設展示を構成する。

次に、展示構成上の留意点を記す。

- 1) 歴史の積み重ねをとおして、「萩」と「人々の暮らし」を紹介する展示とする。
- 2) 「萩」の人々の暮らしを、実証的に「さぐる」ことができる展示とする。
- 3) 五感に訴える展示とする。
- 4) 過去の情景と現代との比較が容易となる展示とする。
- 5) 展示資料との関連を重視した映像を提示する。
- 6) 展示効果をさらに高めるために、音響による演出を行う。
- 7) 展示の解説は、中学生が理解できる程度を目安とする(成人、小学生用には、別途、情報を補う)。

## 8 . 萩市新博物館のインフォメーション活動

萩市新博物館は、地域の博物館としての役割のほかに、この地区を訪れる年間百数十万人もの人々のためのインフォメーション・センターとしての役割をも分担することになる。

具体的には、常設の展示部門とは隔離して、博物館のエントランスホールの一部に情報コーナーを設ける。そこでは、情報機器を用い、「萩」を印象づける映像を常時流すとともに、博物館情報や、まちじゅうに点在する自然、歴史文化遺産、文化施設等の情報を多面的に紹介し、併せてそれらの利用情報なども提供する。

新博物館の情報コーナーの役割は、単に来館者への文字のみによる情報の提供にあるのではなくて、静止画像・動画・音声の活用によって、博物館収蔵資料情報の提供、地域情報の提供が主に考えられる。の博物館収蔵資料情報は、博物館が有するさまざまな萩の資料群をテーマごとに解説した情報である。の地域情報とは、萩地域における自然、歴史、文化などについて、「萩」の理解を助け、それらの利・活用を促す情報である。博物館収蔵資料情報と地域情報とは、互いに連関させて提供することにより、情報コーナーの利用者は、従前のメニュー化した観光経路や市内歴史情報等を受身の形で入手するのではなく、主体的に手作りの見学コースや歴史探訪メニュー等を編み出し活用することが可能となる。

さらに、新博物館がインフォメーション・センターとして充実した機能を発揮するには、インターネット上に開設したホームページによる双方向の情報交流を行うことが必要である。それによって、萩ならではの各種地域情報を発信するとともに、萩に関するあらゆる情報を集積することができる。

また、これら機器による情報の提供やインターネットの利用による情報の送受信に加えて、学芸員やボランティアが来館者と直接触れ合い、対話交流することも、よりきめ細かい情報の提供や収集を可能とする。

以上のように、修学旅行生をはじめとする来館者からの意見や感想、インターネットを介した利用者の意見や感想は、萩市へフィードバックされ、次の生涯学習機会の充実や観光・文化戦略に大きく寄与することになるであろう。

## 9 . 地域的・国際的な広がり

近年、博物館の所在する地域の市との姉妹都市関係等を活用して、相互の博物館が交流を進めている例が見受けられるようになっている。

新博物館においても、その地域的・国際的な広がりを視野に入れて、萩市の姉妹都市や萩と歴史的関係の深い都市等に所在する博物館と連携し、学芸員の相互訪問、研修員の受け入れ、共同研究、共同企画展等を進めることが望まれる。

## 10. 萩市新博物館の施設

### (1) 建物計画

萩市内の景観は、良く古きを残している点において全国でも稀少である。しかし残念なことに、堀内地区に残る大規模な武家屋敷の主屋は少ない。新しい博物館が重要伝統的建造物群保存地区の中心に、それを髣髴させることが可能であれば素晴らしいことである。使用勝手、材料などの違いをのりこえて、当時の人々の生活を窺い知ることができるような建物が望ましい。

建築意匠は、萩の自然、歴史、環境、住人と、現代の技術、材料を考え、歴史的景観に配慮し、それにマッチしたものとする。

関係法規、法令ならびに重要伝統的建造物群保存地区にかかる保存条例を遵守することにより、地区にふさわしい建物を計画する。

建設予定地は、現在屋敷跡の発掘調査を行っている。その結果が計画に取り入れられることが望ましい。

耐震性能の高い建物とし、資料の展示、保存に安全で、国宝、重文の展示が十分な施設とする。

床荷重は展示、収蔵関係室で必要な部分は1～3 t / m<sup>2</sup>以上とする。

展示室、収蔵庫等の耐火に関する性能、出火防止、火災時の避難等を考慮するとともに建物計画にあたり、重要伝統的建造物群保存地区の修景を考え、できる限り木造の採用を考慮する。

建物の最高部高は12m程度が望ましい。

「まちじゅう博物館」の構想から情報コーナーを中心としたインフォメーション機能を充実させ、萩の住人はもちろん訪れた人たちが必ず立ち寄る施設として位置づけ、楽しく、変化に富んだ格調の高い情報の提供が短時間にできるよう配慮する。

敷地内はバリアフリーとし、車椅子を使って自由に活動できるよう配慮する。

建築材料、設備の選択にあたっては、建設地の自然条件を充分考慮し、特に塩害防止に注意する。

建物の床は、高潮、出水を考慮し、地盤面よりできるだけ高くする。展示品、収蔵品に適した消火設備を設ける。特に、ケース、収蔵庫内の漏電、加熱などによる防火に考慮する。

廊下、扉などの高さ、幅員は、資料の運搬に十分な寸法とする。

## ( 2 ) 建設敷地

建設予定地は萩の市街地を形成する三角州の西側、旧萩城三の丸にあたる萩市堀内355番地（萩市立病院跡地、萩藩主毛利家一門大野毛利家上屋敷跡、重要伝統的建造物群保存地区）である。建設予定地の東側に隣接して素水園、その東側に市営住宅跡地が所在し、旧外堀の復元と外堀跡に平行する新設道路、今魚店金谷線（外堀東側道路）が施工中である。

萩市病院跡地	14,447m <sup>2</sup>
素水園	2,750m <sup>2</sup>
市営住宅跡地	4,214m <sup>2</sup>

第1種低層住居専用地域

萩市堀内地区伝統的建造物群保存地区

## ( 3 ) 配置計画

市立病院跡地のほぼ中央に、中庭を持つ博物館建物を計画する。東側の素水園は敷地の一部として整備し、銅像はそのまま現在の位置に置く。また、敷地東南角には隅矢倉の復元を検討する。博物館建物との敷地境界は樹木で区切り、銅像の背後に緑地帯を形成するとともに、博物館東庭のプライバシーを確保する。銅像両脇は休憩のスペースとする。

建物へのアプローチは、敷地東南側と北側を考え、一般来館者は南側より、サービスは北側よりとする。車によるアプローチは外堀東側道路よりとする。

## ( 4 ) 駐車場計画

市立病院跡地の東側に今魚店金谷線（外堀東側道路）が計画されており、博物館開館と道路の完成が同時期になる。外堀東側道路と病院跡地の間に市営住宅跡地があり、そこに駐車場を計画する。建設予定地北側には職員、搬出人者などの駐車場を設ける。なお、市営住宅

跡地については、外堀跡保存整備計画で土塁の復元が計画されていることもあり、当面は駐車場として利用し、恒久的な建物は設けない。将来この計画が具体化する時には、駐車場を別の場所に確保する。

#### 駐車台数計画

市営住宅跡地	バス	10台
		乗用車 95台
建設予定地南側		自転車 80台
建設予定地北側		乗用車 10台

#### (5) 各施設計画

建物の計画床面積合計は、4,600m<sup>2</sup>程度とする。

建物は、大別すると下記の5施設に分けられる。

- 1) 展示施設
- 2) 資料の保管施設
- 3) 調査研究室
- 4) 教育普及活動施設
- 5) 管理・その他の施設

五つの施設は、管理上(設備、防犯、防災など)独立して使用できることが望ましい。ただし、3) 調査研究室と5) 管理・その他の施設は一緒によい。

##### 1) 展示施設

常設展示室、企画展示室およびその付属室より構成される。

常設展示室は移動間仕切りで数室に分割される。来館者が自由に展示室を選択できる配置とする。

展示ケースは固定、移動式とも、基本的にエアタイト型とし、ガラスはミュージアムガラスの使用が望ましい。

移動ケースは固定方法を考え、地震時などに危険がないようにする。

ケースの照明は、紫外線および発熱の防止を考慮し、照度の調節が可能なものとする。ケース内の照度分布にも考慮する。

ケース内の下地材は、ノンフォルマリンでかつ調湿性のある材料の使用が望ましい。

ケース外よりの照明がケースのガラスに映り込まないように、照明器具およびその配置を考える。

ケースの床は、展示品の重量に充分耐えられるようにする。

ケースは、展示品、照明器具および調湿剤などの交換がしやすい構造とし、光もれの心配がないようにする。

## 2) 資料の保管施設

特別収蔵庫、一般収蔵庫およびその付属室より構成される。

収蔵庫は、収納品により室内温湿度が変えられるようにする。天井高はできるだけ高くとり、資料を多く収納できるように配慮する。室内温湿度は、機械的設備エネルギーのみにたよらず、なるべく自然に調節できることが望ましい。

搬入室は4tトラックが完全に入れるようにし、外部とはシャッターで遮断する。

荷解室に2t用リフトを設ける。

資料整理作業室には流し台を設ける。

## 3、5) 調査研究室、管理・その他の施設

学芸、事務、設備機械室、およびその付属室より構成される。

事務室、エントランスホールの一部で利用しやすい位置に、受付窓口、切符売り場、傘置き場、ロッカー、公衆電話、車椅子等を配置する。

ボランティアの控えスペースおよび研究者の資料閲覧スペースを設ける。

## 4) 教育普及活動施設

エントランスホール(情報コーナーを含む)、体験学習室、講座室、天体観測室などから構成される。

エントランスホールは、観光バスによる来館者も多数入場する。情報コーナーとの一体化を図り(間仕切りを設けないなど)、常時萩市の紹介を行い「まちじゅう博物館」の中核施設としての役割が果たせるよう、明るく、広々とした空間とする。情報コーナーは、映像設備、情報検索ブース等を備え、団体来館者の利用にも対応できるものとする。同時にミュージアムショップ、喫茶・軽食コーナーを充実させ、季節のよいときは屋外への進出も考える。

講座室と体験学習室は、移動間仕切りの取り外しによって、100名程度収容可能な部屋とする。机など固定式にしない。部屋の一部に机、椅子などの収納庫を設ける。体験学習室には流し台を設け、床は防水施工する。

## 萩市新博物館基本構想

講座室には、ビデオプロジェクターなどの視聴覚機器を備え付ける。体験学習室から東庭へ直接出られるようにし、屋外に屋根のついた体験フィールド（流し台付き）を設ける。

天休観測室は、木立および施設から全天の見通しがよい場所に設ける。夜間利用のため、外部よりの直接出入りが可能となるよう考慮する。

部門別面積（延床面積：4,600m<sup>2</sup>程度として）

1. 展示施設 1,400m<sup>2</sup>程度（30%）

常設展示室（1）～（3）

企画展示室

展示準備室

倉庫（3）

休憩室

廊下

2. 資料の保管施設 1,500m<sup>2</sup>程度（33%）

特別収蔵庫

一般収蔵庫（1）～（4）

資料整理作業室

一時保管庫

荷解室

搬入室

燻蒸室

倉庫（2）

機械室（2）

廊下

3. 調査研究室 200m<sup>2</sup>程度（4%）

学芸研究室

スタジオ

書庫

4. 教育普及活動施設 900m<sup>2</sup>程度（20%）

講座室

体験学習室

情報コーナー

エントランスホール（風除室を含む）

ミュージアムショップ

喫茶、軽食

化粧室

天休観測出入口

天体観測室

萩市新博物館基本構想

5. 管理・その他の施設 600m<sup>2</sup>程度 (13%)

事務室

館長室

応接室

会議室

機械室 (1)

警備員室、便所、更衣室、シャワー室、湯沸室

倉庫 (1)

廊下

合計 4,600m<sup>2</sup>程度 (100%)